

### 同時代史料が語る只見の歴史⑤

#### 矢澤家旧蔵の陶磁器(1) — 矢澤家と木箱墨書銘陶磁器 —

##### 矢澤家について

塩沢の河井継之助記念館は、故矢澤大二氏が保存されていた終焉の間や遺品をもとに開館したものです。矢澤家は司馬遼太郎氏の『峠』の主人公になった長岡藩家老河井継之助が長岡の戦鬪で負傷し、若松に向かう途中の慶応四年(一八六八年)八月十六日に四十二歳で終焉を迎えた家で、当時矢澤家は医師を家業としていました。大二氏のお話によりますと、矢澤家は中世に金山谷などを支配した山内氏の家臣でしたが、豊臣秀吉の奥羽仕置によって山内氏が所領を失ったため、帰農したということでした。江戸時代に矢澤了祐が医師を開業しますが、その時期は位牌に記された没年により一八世紀中頃以降と考えられます。以後、玄説・宗益・宗篤と四代にわたり昭和初期まで医

師を続けました。大二氏の曾祖に矢澤家で所蔵する陶磁器の調査をする機会を得、五四器種(陶器一三器種、磁器四一器種)を末から一九世紀が中心で、生産地は陶器が会津本郷産、磁器は肥前産(佐賀県産)のものが多かったです。このうち一五器種が木箱に入っており、木箱の蓋の表・裏・側面などに購入年月日、器種名、購入者、また一器種ですが購入先の墨書銘があります。これらの墨書銘から木箱に入っている陶磁器の使用年代や当時何と呼ばれていたか、そして流通を知ることができま

##### 木箱墨書銘陶磁器

筆者は平成二年(一九九〇年)

す。木箱は購入者が大工につくらせたようです。一五の木箱の一つに「大工源右工門作」と記されているのがあります。購入年月日は最古が寛政六年(一七九四年)、最新は慶応二年(一八六六年)で、購入の期間



▲文久3年購入の奈良茶碗と木箱

は七二年に及びます。

一五器種の陶磁器は皿類、碗類、その他に大別でき、皿と碗が三分の二を占めます。それぞれの名称から当時の呼び名がわかります。皿類は上皿、小皿、長皿、砂鉢(さぼち)です。碗類は一寸口、茶盃、登艸茶碗、飛々焼茶碗、奈良茶碗、南京奈良茶碗です。その他は猪口、眼家具蘭曳(がんかくらんびき)で、普通の家庭ではゴキ(木で重、透井、義屋満陶盃洗です。購入者は「矢澤氏」のみで名前が特定できないのが二、矢澤玄説が五、矢澤宗益が八です。玄説は千秋堂、衆益は千穂堂と文

前に特定できないのが二、矢澤玄説が五、矢澤宗益が八です。玄説は千秋堂、衆益は千穂堂と文



▲寛政6年購入の上皿の木箱